

フランス留学からiPad一台で掴んだ公認会計士試験合格への軌跡 「理解100%」の学習戦略とメンタル管理術

本記事では、フランス留学中に学習を開始し、紙のテキストを一切使わない「フルデジタル学習」という独自のスタイルで見事合格を果たした上野悠佑太さんの貴重な体験談をお届けします。

上野さんが実践したiPadとiPhoneを駆使した効率的な学習法、そして「1日24時間をどう捉えるか」という独自のタイムマネジメント術は、多くの受験生にとって現状を打破するヒントになるはずです。また、学習初期における「理解100%」の追求から、直前期の「暗記へのシフト」まで、合格に向けた具体的なステップを詳細に解説していただきました。

合格者紹介

上野悠佑太さん



- 経歴：文学部出身。フランス留学中に公認会計士の学習をスタート。
- 学習スタイル：完全ペーパーレスで、iPad・iPhone・イヤホンの3点で合格。移動中はiPhone、机ではiPadと、デバイスを使い分けて効率的に学習。
- モチベーション：「合格祝賀会」の会場（ホテル）を眺め、「あそこに行く自分」を想像してやる気を維持。

インタビュー

フランス留学とフルデジタル学習の始まり

——以前、電子教材のスクリーンショットで送っていただきましたが、その資料は非常に整理されており、驚きました。まずは、なぜ電子媒体をメインに

しようと思ったのか、そのきっかけから教えてください。

上野：

電子媒体で勉強を始めた最大の理由は、学習を開始した当時の環境にあります。私は一時期フランスに留学してしまっていて、そこからCPA会計学院に申し込んで勉強をスタートしました。当然ながらフランスにテキストを何冊も送ってもらうのは現実的ではありませんでしたし、物理的な場所の制約から通信生として学習せざるを得ない状況でした。そのため、最初から絶対に電子媒体だけでやるぞと意気込んでいたわけではなく、「やらざるを得ない状況」から始まったというのが正直なところです。

——なるほど、留学がきっかけだったんですね。海外からのスタートとなると、確かにデジタル化は必須だったと思います。実際に始めてみて、電子媒体ならではのメリットはどのように感じられましたか？

上野：

日本に帰国してからもその形を変えることなく、最後までデジタルで通しましたが、これはそれほどまでにメリットが大きかったからです。iPadでは「GoodNotes」というアプリを使いながら勉強していたのですが、**最大の利便性は「iPad、iPhone、イヤホン」の3つだけで、全ての学習が完結するというコンパクトさ**にあります。どこへ行くにもこれだけでいい。この身軽さは、受験生活において大きな武器になりました。

——デバイス間の同期についても、かなり活用されていたようですね。

上野：

GoodNotesはiPadとiPhoneで瞬時に同期が取れます。例えば、電車の中ではiPhoneで講義動画を見ながら、気になった論点をiPhone上のテキストにメモします。そして目的地である大学に到着してiPadを開くと、電車内で書いたメモがすでに反映されている。そのままスムーズに本格的な学習へ移行できるわけです。紙のテキストだと「電車で確認した箇所を、後で机に向かった時に書き写す」といった作業が発生すると思いますが、デジタルならそのロスが一切ありませんので、非常に効率的だと思います。

——効率性の面では圧倒的ですね！

上野：

また、よく「五感を使って覚えたほうが良い」「物理的なテキストの位置で記憶する」という話を聞きますが、私個人の感想としては、デジタルでも全く問題ありませんでした。GoodNotesで「このフォルダの、このテキストの、このページのここ」という情報は、頭の中で思考回路として構築されていましたし、紙のテキストと同じ感覚で視覚的に把握できていました。むしろ、検索性や一覧性はデジタルのほうが高いと感じる場面も多かったです。

計算問題の解き方と「紙」への切り替えタイミング

——計算問題についても伺いたいのですが、計算過程などはどのように管理されていましたか？やはり計算だけは紙のノートなどを使っていたのでしょうか。

上野：

初期の段階では答練ですら全てiPad上で解いていました。GoodNotesなら問題のページのすぐ下に白紙のページを追加できます。そこにメモ書きをしながら1ページ目の問題を解く、というスタイルで十分対応可能でした。

ただ、本試験は紙による試験である以上、「紙に慣れる」というプロセスも無視できないと感じるようになりました。そのため、直前期になればなるほど、紙を使う機会を意識的に増やしました。

具体的には、**短答式試験の直前答練3回目、4回目**や、**論文式試験の模試などは、会場に足を運んで紙で解いた方がよい**というのが私の考えです。学習の8割から9割はデジタルで完結させ、残りの1割、特に「時間配分」や「紙への書き込み」が重要になる局面では、徹底してアナログの環境に身を置く。この使い分けが重要だと思います。

——紙に慣れるというプロセスで不安を感じることはありましたか？

上野：

文学部での勉強で紙に文字をたくさん書く機会がありました。そのため、私自身は試験直前に紙媒体へ移行しても、違和感や緊張感を持つことなくスムーズに適應できました。しかし、**普段から全く文字を書かないという方**の場合は、**もっと早い段階から紙に慣れておく必要があるかもしれません**。自分の生活習慣に合わせて、デジタルとアナログのバランスを調整することをお勧めします。

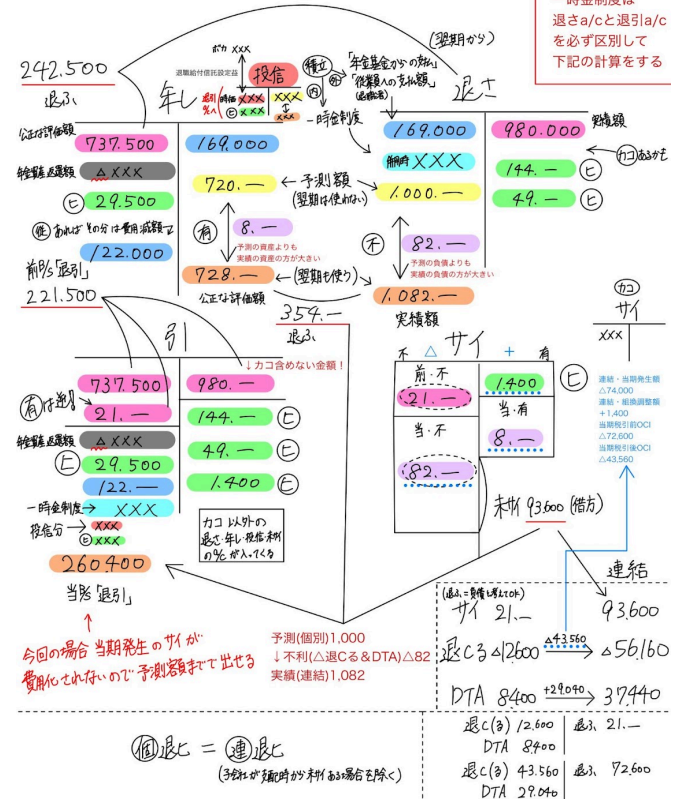
——電卓についても、最初から実機を使われていたのですか？

上野：

電卓だけは最初からCPA公式のものを使用していました。計算過程はiPadに書いても、**電卓を叩く動作は物理的な感覚が重要**ですので、そこは本番と同じ環境を維持していました。

「理解100%」から始まるテキスト加工術

- ・退引a/cは「前期末の退職給付引当金」から「当期末の退職給付引当金」を算定する勘定
＝最初のピンクは必ず前期末の退職給付引当金になる(未認識の差異を反映させる)
- ・有利不利の間違えが多いので、間違えないようアンテナを張っておく
- ・前期に前払年金費用が発生し、当期に年金資産の返還がなされた場合、まずは返還額をC/前払年金費用(退引)未処理サイ×(返還額÷返還時の年金資産)の金額分費用処理(残りの未処理サイは通常処理)



↑退職給付会計の論点記載例

——次に、具体的な学習法について深掘りさせてください。上野さんは、テキストの加工をどのように行い、回転させていたのでしょうか。

上野：

テキスト加工は、1年以上の期間をかけて徐々に完成形に近づけていくというスタイルでした。例えば、財務会計論の「退職給付会計」の論点。これは学習のかなり初期段階からメモを書き込み始め、論文式試験が終わるまでずっと、新しい発見があるたびに情報を付け足し続けました。一度に完璧なまとめノートを作るのではなく、加工に加工を重ねていくイメージです。

1日24時間を引き算して考えるメンタル管理術

—学習時間やモチベーションの維持についてもお伺いします。長丁場の試験勉強において、精神的な安定を保つ秘訣は何でしょうか。

上野：

これは受験生活を通じてずっと自分に言い聞かせていたことなのですが、独自の「24時間の捉え方」があります。1日24時間のうち、しっかり8時間の睡眠を確保します。さらに、毎日10時間の猛勉強をしたとします。それでも、まだ「6時間」も余ります。

—10時間勉強しても6時間余る……。そう言われると、確かに余裕があるように感じますね。

上野：

そうなんです。「10時間も勉強しなきゃいけない」と考えると重苦しいですが、「**10時間やったところで、あと6時間は何をしたらって自由だ**」と逆算するんです。この余った6時間で、映画を観に行ったり、カラオケやボーリング、サイクリングを楽しんだりしていました。論文式試験の1ヶ月前でも、普通に一人で映画館へ足を運んでいました。

—直前期に映画とは、かなり大胆なリフレッシュですね。

上野：

勉強を「苦行」にしないための仕組み作りです。「**勉強は苦じゃないよ**」と自分に思わせるために、**精神論だけでなく、実際のスケジュールとして「自由な時間」を組み込む**。この発想の転換があったおかげで、最後まで燃え尽きることなく走り抜けることができました。受験生の方は、勉強時間という「足し算」だけでなく、自由時間という「引き算」の視点を持つと、心が軽くなるかもしれません。

—非常に興味深い考え方です。勉強時間そのものに集中するために、あえて休みの時間を明確にするということですね。

上野：

はい。しっかり寝て、全力で勉強し、残りの時間で遊ぶ。これが私の合格ルーティンでした。

通信生としての孤独を打ち破る活用術

—上野さんは通信生として学習されていましたが、通信特有の「孤独感」や「情報不足」はどのように解消されていきましたか？

上野：

確かに、通信生は自習室が使えないなどのデメリットはあります。もし東京にいたら、自習室が使える通学生を選んでいたと思います。帰国後は、割引制度がある外部の自習室を自分で契約して利用していました。しかし、CPAが提供しているオンラインサービスをフル活用することで、孤独感はかなり軽減されました。

—具体的にはどのサービスが役に立ちましたか？

上野：

特に「**オンラインのオープン面談**」は非常に有益でした。テーマも多種多様で、答練後の復習方法について講師が語るものから、まさに「iPadでの学習攻略法」といったニッチなもの、直前2週間の過ごし方を一緒に考えてくれるものまで、数え切れないほど参加しました。受講生専用サイトで定期的にスケジュールを確認し、タイトルを見て気になるものには片っ端から申し込んでいました。

—オープン面談での講師や他の受講生とのやり取りが、刺激になったのですね。

上野：

そうです。講師の方から直接話を聞けるだけでなく、**他の受講生の悩みを聞くことで「自分だけじゃないんだ」と思えました**。また、CPAバーチャル校での質問対応も活用しました。**通信生であっても、これだけ多様なオンラインイベントが用意されている予備校は他にないと思います**。これを積極的に利用するかどうかで、学習の質とモチベーションは大きく変わるはずですよ。

合格祝賀会という名の最強のモチベーション

—アンケートの中で「合格祝賀会に行くことが勉強の原動力だった」と書かれていましたね。

上野：

大学のすぐ近くに祝賀会の会場となるホテルがあり、勉強中も常にその建物が目に入っていました。勉強で疲れた時、あのきらびやかな会場で合格を祝ってもらう自分を具体的に想像することで、何度も自分を奮い立たせることができました。

—実際に参加してみて、いかがでしたか？

上野：

想像していた以上に素晴らしい空間でした。**格式高い会場で、憧れの講師陣と直接お会いでき、これまでの苦労が全て報われたと感じました**。ギャップは全くなかったです。これから合格を目指す受験生の皆さんにも、ぜひ自分が祝賀会に参加している姿を

強くイメージしてほしいです。そのイメージが強ければ強いほど、苦しい時期を乗り越える力になります。

受験生へのメッセージ

——最後に、現在学習を続けている受験生の皆さんへ、一言メッセージをお願いします。

上野：

一番伝えたいのは、「CPAを信じれば間違いない」ということです。これは合格した今だからこそ、確信を持って言えます。教材、講師、そしてオンラインを含めた各種サービスを信じて使い倒してください。そして、何より「楽しむ」ことを忘れないでください。難しい論点を理解できた時の喜びや、知識がつながっていく快感を大切に、受験生活そのものを楽しんでほしいと思います。

——上野さんの言葉は、多くの受験生に勇気を与えていると思います。本日は本当にありがとうございました。

上野：

こちらこそ、ありがとうございました。皆さんの合格を心より応援しています！

まとめ

今回の対談を通じて、上野悠佑太さんが合格を掴み取った秘訣が見えてきました。ポイントを振り返ってみましょう。

・フルデジタル学習の効率性

iPadとiPhoneを同期させ、GoodNotesを活用することで、スキマ時間を最大限に活用する

・「理解100%」から「暗記」へのグラデーション

初期は「なぜ？」を追求し、学習を趣味のように楽しむ。直前期は、合格のために徹底的な暗記ヘシフトする

・「引き算」のタイムマネジメント

24時間から「睡眠」と「勉強」を引いても残る「自由時間」に着目し、リフレッシュを罪悪感なく取り入れる

・紙媒体への戦略的な切り替え

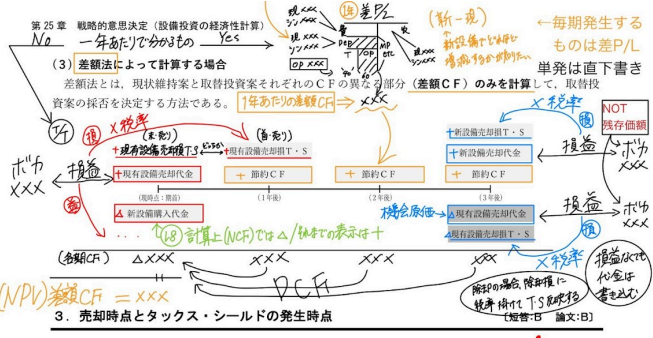
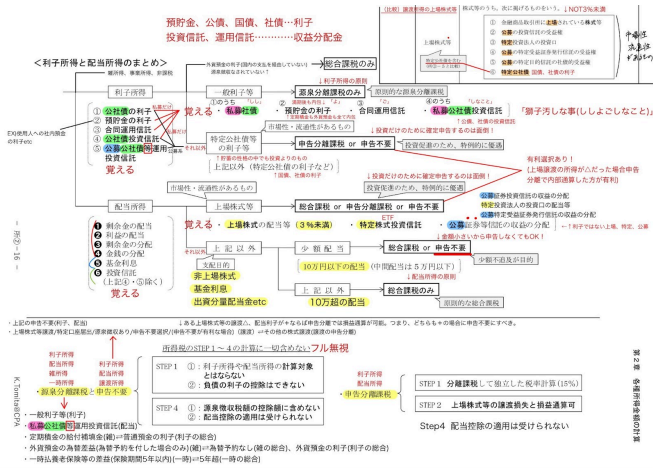
デジタルで効率を稼ぎつつ、本番を想定した答練や模試では必ず紙とペンを使い、実戦感覚を養う

・予備校のサービスを使い倒す

オープン面談などのオンラインイベントに積極的に参加し、情報収集とモチベーション維持に役立てる

公認会計士試験は、険しく長い道のりです。しかし、上野さんのように自分に合った学習スタイルを確立し、心に余裕を持ちながら進んでいけば、必ず光は見えてきます。

次ページ以降、上野さんのテキスト加工・論点のまとめノートに掲載しています。

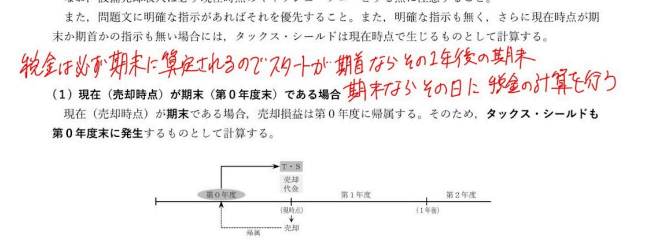


3. 売却時点とタックス・シールドの発生時点

取替投資においては、現時点で現有設備を売却することになるが、「現在(売却時点)が期末(第0年度末)なのか期首(第1年度期首)なのか」によって売却損益の帰属年度が異なる。法人税の計算および支払いは年度末に実施されるため、この売却損益に対して課税される法人税は、損益が発生した期のキャッシュ・フローとして認識される。そのため、**タックス・シールドの発生時点も「現在が期末(第0年度末)なのか期首(第1年度期首)なのか」によって異なる**と考えられる。

なお、設備売却収入は必ず現時点のキャッシュ・フローとする点に注意すること。

また、問題文に明確な指示があればそれを優先すること。また、明確な指示無く、さらに現時点が期末か期首かの指示も無い場合には、タックス・シールドは現時点で生じるものとして計算する。



(2) 現在(売却時点)が期首(第1年度期首)である場合 **無答無用で当期末にT.S.言え**

現在(売却時点)が期首である場合、売却損益は第1年度に帰属する。そのため、**タックス・シールドも第1年度末に発生するものとして計算する。**



(18) 在庫保有していない場合は常に考える。毎期生産可能個数までしか売れない